

第2回 佐倉市におけるこれからの学校のあり方懇話会

日時	令和6年10月10日（木）午後3時00分から午後5時00分まで
場所	議会棟 2階 第3委員会室
出席者	○出席委員 古賀 毅委員、定野 司委員、辻 太久郎委員、宮本 正教委員、岡島 由夏委員 以上 5名 ○事務局 緑川教育部長、宮崎教育総務課長、村上学務課長、榎本指導課長、神成教育センター所長、舎人社会教育課長、新川副主幹、伊藤主査、榊田主査補、大野主査補 ○傍聴人 2人
配付資料	・次第 ・資料 1 児童生徒数の減少に伴う影響への対応について ・資料 2 アンケート調査票（案）について ・資料 3 保護者・市民・教員向け案内文（案） ・資料 4 児童生徒向け案内文（案） ・資料 5 児童用__アンケート調査票（案） ・資料 6 生徒用__アンケート調査票（案） ・資料 7 児童保護者用__アンケート調査票（案） ・資料 8 生徒保護者用__アンケート調査票（案） ・資料 9 市民・未就学児保護者用__アンケート調査票（案） ・資料 10 教員用__アンケート調査票（案）
議事	① 児童生徒数の減少に伴う影響への対応について ② アンケート調査票（案）について
以下、議事内容	

1 開会

2 議事

～議事① 児童生徒数の減少に伴う影響への対応について～

【会長】

それでは次第に沿って進行してまいります。

議事の①「児童生徒数の減少に伴う影響への対応」について、事務局からご説明をいただきます。よろしくお願いします。

【事務局】

(資料 1 に基づいて説明)

【会長】

業界関係者は割とこれピンとくる話なのですが、お聞きになってどんな印象とか、感想をお持ちでしょうか。

【委員】

母親目線では人数が少なくなると良いというイメージがあって、先生が忙しくて大変だというのは何となくわかっていましたが、今の説明のように、先生方の人数割り当てが決まっていることを初めて知りました。生徒数が少ないと、細やかな目が届くような学校生活が送れるという考えがあったのですが、それは少し違うのかなと今の説明から感じました。

【会長】

そうですね。ここでは小学校と中学校の話になりますが、小学校と中学校でもだいぶ違った面があるでしょうし、もう少し細かく見ても、小学校の高学年や中学年でも違いはあるかもしれないですね。

それから今お話もあったように、中学校は教科担任制で、例えば英語の免許の人は英語しか基本的に教えてはいけけないので、その中で回さなければいけないというような運用上の難しさが、中学校の方にはあります。

それでは委員の皆様から、順序は特に問いませんが、この件について、ご発言いただければと思います。いかがでしょうか？

【委員】

さきほどの話は現状を全く知らなかったもので、本当に驚いたのですが、親は学校の中を知らない、現状がまったく分からないと思います。みんな、児童生徒数が少なければ良いだろうという考えに陥ってしまうので、現状を知る機会を設けていただいて、学校と対話する場面があれば、理解が深まって先生方の負担軽減にもつながると思います。

【会長】

世間の皆さんはあまり関心がないというか、視野に入っていないかもしれませんね。

学校教育はみんな児童生徒として経験しているため、そんなものだと思って仕組みとかを改めて問うことがないから、中に入ってびっくりすることがあります。この問題が深刻になってきたのは急なことだと思いますが、先生方のところでも未来の話をしてはいますが、現実には既に子どもたちに対して、影響がみられることはありますか。

【委員】

肌感覚としてはまだ先の話と認識しています。コロナ禍を通じて実感したのは、学校に來ない期間が長かったことが原因なのか、そのせいだと決めつけるのは難しいかもしれませんが、子ども達のコミュニケーション能力や、人間関係を形成する力の低下を肌感覚で感じました。テレビのドキュメンタリーで離島の1人だけの児童が、複数の先生や地域の方から手厚く指導を受ける場面はうらやましいですが、町の大きい学校に行ったときに、人間関係スムーズに作れるのか、自己主張ができるのか、そういったところに教育者の立場として心配してしまいます。

【委員】

本校は市内2番目の大規模校で、大体学年4クラスですが、一部3クラスの学年もあります。小学校は、来年から1クラス35人の体制になるわけですが、1クラス35人だと $35 \times 3 = 105$ 人で、105人であれば、転入1人2人来て、来年4クラスにならないか。107人ぐらいの学年は1人2人が転出すると、学校全体がざわざわします。学級数の増減＝教員の増減なので、日々学校は瀬戸際というか、ハラハラドキドキの連続です。保護者さんは35人というリミットとなる数字について知るすべがないという部分で、学校のハラハラ感と保護者の感覚に違いが出ることはなるほどなと思いました。

市内の人口があそこまで減ることについては、正直なところ想像以上の数字でかなりショッキングです。ただ、やはり現場としては、全体が増えるか減るかというよりは、1クラス的人数が35人であるとやはり目が届きにくく、20人程度であると目が届きやすいという、要はバランスの問題なのかなと思います。

【会長】

目が届きやすいというのは、学年による違いとか、先生のセンスにもある程度よりですか。一般的に35だと割と厳しい？

【委員】

多すぎても少なすぎてもというのはありますが、18人の1クラスと35人の1クラスを比べてみれば一目瞭然だと思います。ただ、やはり少なすぎても関わりが少なくなるとかはあると思います。

【委員】

教員が増える時と減る時がありますが、減る時というのは異動を伴うということになります。その時は、たいてい長く在籍しているベテランの先生が取られてしまうことが

多く、そのことで学校運営が厳しくなるのはしばしば見てきました。増えるときはそれほど感じないのですが、減るときにはまさに指摘の話が起こり得ます。

もう一点は、人手不足で教員を張れなくなる時代というのも、それに拍車をかけていると思います。教員を張れないところでは非常勤で張ることになりますが、特に時間講師の場合には校務が分担できないことから、他の残った専任の先生たちで校務を回さなければなりません。そうすると生徒指導が手薄になり、そのことで学校運営が厳しくなってしまう。子どもの数が減るときには、本当にどうしていくかを考えなければならず、まさにそれがこの問題のテーマだと思います。

また、多様な子ども達を受け入れるということは、やはりそれだけ手間がかかるので、先生の数が一定程度ないと厳しいのと、たくさんの目があるということが必要です。教員以外でもそういった支援する人間をどれだけ確保できるかが重要で、学校の中だけではなく他のいろいろな福祉の部門、具体的にはスクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーなど、そういった方々の手を借りないと難しくなっているのが、今の学校運営の現状だと思います。

【会長】

学校には、教員以外の専門職が必要になるのですよね。「チーム学校」という言い方を国ではしていますが、実際にはスクールソーシャルワーカーにしても学校カウンセラーにしても、非常勤の巡回はほぼほぼ固定化され、また、学校に限らず福祉全般がいわゆる待遇が良くない状態で、良質な人材がまわってこないという社会の仕組みになっていて、そのツケが回って今来ている感じはします。

近年は、教員になりたくてもなれない方が減りつつあり、良質な非常勤講師が不足しています。また、教員免許を持っていたとしても、免許だけ取って社会に出て、教壇に立つ気がない人がほとんどです。従来であれば、なりたいたけど教員採用試験に受からなかったという人が結構いて、時間講師を喜んでやっていましたが、今はもうそのバックアップが全然ないです。ということは、あまり質の良くない、スキルのない人が供給されるというリスクが相当あるように思います。

景気のいい話はないですね。明るい未来の方に話を持っていきたいので、もう少し現状の心配事やご報告などございましたら教えてください。2020年代後半から2030年ぐらいでどうにかできれば理想的です。

少なすぎるとクラスのメンバーに応じた当たりはずれが顕著になってしまいます。30いくついるとすごく優秀な生徒と問題のある生徒には目が行きますが、中位の平均の児童生徒にはなかなか目が届きにくくなる。

【委員】

地域性にもよると思います。生徒数に幅のある地域とそうでない地域と、自分のところだけでなく、他の非常に上手くいっているところと比較してもあまり差がないように思います。だから、ターゲットが絞りやすいかというと、私のいた所では非常にこの幅があり、ターゲットをどこにしていいいのかうまくいかず、上下両方または上にレベルを合わせることになる。下に合わせようとすると他に手が届かなくなってしまう。そうすると、チームティーチングでやっていくということになり、教員が必要になります。

本来であれば人口が減って先生の人数が余って、遅れ気味な子のフォローが出来るはずですが、それができないことが問題なのだと思います。

【委員】

先生という職業はなぜ人気ないのでしょうかね。

【会長】

これも地域差はあって、地方であれば人気な傾向にはあります。関東と地方で連携して、本当は地元に行きたいけれども地元で受からなかった方は、関東で7、8年生をやり、FAで地元に戻れるような取り組みも実施していました。近年は地方でも倍率は下がってきています。また、小学校は特に離職率が高く1年以内に多くの人が辞める傾向があります。

インターネットの時代なので、教員は大変だというのがSNSやネットニュースで駆け巡って、そこに文部科学省の対応がかなり悪手で、それに拍車を掛けた可能性はあります。ブラックっていう今の流行語が張りついてしまったのですね。それが一番の人気薄の要因であろうかと思います。

近年では教職課程の履修を親から止められる場合もあります。教職課程で必要な履修科目が私の時代よりも大幅に増えて、教職課程を履修しない学生よりも25%～30%増しぐらいの授業を受けないといけないので、そういうこともあるかなと思います。

【委員】

最近何かで聞いたニュースかメディアで見たのですが、日本人もワークライフバランスの意識が欧米並みになりつつありますが、そもそも日本人の従来の働き方がそれにそぐわず、特に教員という仕事はそれに合致しにくく感じます。

大変だと思うことがたくさんあるものの、それ以上のやりがいがあるが我々教職員を支えていて、だからこそやっていけるという思いがありますが、今の若い人たちというと、ひとくくりにはなってしまうのですが、そういうところに価値を見出さないのかなと思うところがあります。

ただ、教員の仕事が若者のニーズには応えきれておらず、職業として若者が魅力を感じないのはわかる気がします。

【委員】

先生方が、空き時間に何をしたいかという質問に対して「教材研究がしたい」や「子どもと触れ合う時間がほしい」。先生方は真面目なのです。それをブラックと言うのだったら、ブラックでいいじゃないかという話ですが、ただそれに耐えられない方が多くなっていて、離職率が高くなっていることも事実ではあります。

でも、やりがいを持ってやっている方も多いので、今回のアンケートにもそういうことを載せていただいて、どうお感じになっているのかを確認すれば、そういったものをもっとはつきりわかるのではないかと思います。そうすると、学校を一つの職場と捉えて、やりがいがある職場ということがわかれば、志望者が増えて、子供たちの教育にも反映できると思います。

私の学校は私立学校ですが、不登校特例校なので、やりがいはどこに見出すのかという点から、教員の応募が来るのか不安でしたが、全国から希望者が、特に公立の学校から多く来ました。辞めてきた方に志望理由を聞くと、子供たちのために何ができるのかを真剣に考えてみたい、自分がやってきたことを挑戦してみたいということでした。

さらに進んで言うと、私も非常に反省していますが、教育委員会は大きな組織の中で動いていて、小さな勇気やチャレンジがなかなかできなかったのかなと思います。今になってみれば、両方経験しているので、そういった意味ではそのようなチャレンジをさせるということをもっと奨励して、やりがいや生きがいのある職場なのだとことを実践すること自体が、これからの志望者を増やして、良い教育ができる源になるのではないかと考えています。若い先生が結構うちに来るのはそういう理由なのではないかなと思います。

【会長】

さきほど産業がないから、地方では先生を目指していたという話をしましたが、そういう発想ではもうもたないと思います。逆に、変わり目だからやりがいがあるって自分たちが新しいモデルを作っていく発想があっても良いのかなと思います。

ちょうど千葉県も、先日教員採用試験の結果が最終的に出て、来年から採用される人が決まったところですが、それに合わせて講師登録が始まっている段階です。ここ1週間くらいで、現職の先生に自分の体験や展望を話してもらい、教員の魅力を発信するという試みを進めています。今更勝手な話ではありますが、これまで閉じこもって、対外的な発信を怠ってきた反省はみんなあると思います。

【委員】

私も何かの新聞で見たのですが、小学生が憧れるなりたい職業ということで、学校の先生が男女ともに5位以内に入っていたと思うのです。小さい子供たちがなりたい職業、将来目指す職業、自分もやってみたいなど憧れる職業の中に、先生というのが根強く残っているというのが感じ取れました。

自分の職場を見る限りでも、世の中ではブラック、ブラックと言われますが、そんなに毎日嫌々子供に対面しているわけでもないですし、嫌だ嫌だと言いながら仕事をしているわけでもなく、むしろ子供のためならあれもやってあげたい、これもやってあげたいという思いが膨らんでくる人たちがすごく多いかなと思います。世の中の言われ具合と、実情を見たときには、若干のギャップを感じます。

ただ、そのような中でも、子供に関わることについては本当に身を粉にしてやってあげたいという思いはあるのですが、本当にこれは教師でなければできない仕事なのかと感じる部分が多いこともあります。例えば、草刈りを含めた施設の管理や、行事の準備等。そういった部分がもしかしたらブラックだとか、負担に感じる要因なのかなと思います。子供の話を聞く、授業準備やプリント作成、丸付けというのは、教師の喜びの一つでもあるのは、昔も今も変わらないのかなと感じていて、それをブラックの要因というのは大きくりにせず細分化して、問題のある部分について軽減すると良いと思います。

【会長】

学校の規模の話に持っていこうと思いますが、先ほどご説明いただいたように、児童生徒数に合わせるならば、学校は小規模化するかあるいは統廃合していくしかない感じですが、二者択一ではなく他の観点はないのでしょうか。

学校生活を送っているときは、小中学生にとっての1年間はものすごく長いので、この1年間、とにかくみんなで仲良くするとか、協力して合唱コンクールや運動会をやるということがあるのですが、いずれ卒業して社会に出て行って、ばらばらになっていろいろな場所で活躍していく、場合によっては海外に出て行くというときに、さきほどのお話にもあったように、社会性やコミュニケーション能力の点で通用するのだろうかという心配はあります。

11歳前後、つまり小6から中1・2くらいが大きな転換点で、ピアジェという発達心理学の大家は「形式的操作の段階」というふうに呼んだのですが、抽象的に物事を考えられるようになる段階で、片端から知識を暗記していくだけでは無理で、概念という整理が出てきて、抽象的な思考ができるようになる。ある程度できるようになると、自分自身も客観的に捉えられるようになるし、友達ともそういう付き合いができるようになるし、しなければならなくなる。またあるときには、自分の進路や適性みたいなことも。それを捉える力も備わるから、そこでコンプレックスを持ったり、異物感を持ったりします。

だから、とても難しい段階において閉じてしまうリスク、つまり少子化によって分母は極端に減って、接する仲間の数が足りなくなると、多様性も何もなくなってしまいます。ただでさえ子供は、放っておけばいつものメンバーとベタベタして、そこをはみ出さないし、昨今そこにSNSやLINEみたいなものが介在すると、ますます自分たちには関係ない人に対して、線を引いてしまうことがあります。

従来例えば、クラスでやる行事や学年でやる行事、全校でやる行事に対して、行動を拡大して行って、普段会わない友達と一緒に運動会の準備する機会を通じて、少しずつ社会化していくというのが学校の仕組み、仕掛けとしてあったのですが、学級数そのものが少なく1学年1クラスになってしまうとそうした探求はできず、いつもの延長でしかなくなってしまい、それでいいのかという話になってきます。

現場の感触も含めていかがでしょうか。

【委員】

単学級の弊害は大きく、小学校では6年間ずっと同じ集団にすることになります。グループができたり、相性が悪い子が現れたとしても、それがずっと続いてしまったり、いじめに繋がったりします。不登校は最近増えているのですが、そういったことが影響している可能性が高いと言えます。

多様な子たちとある時は喧嘩しても良いでしょうし、いろいろ切磋琢磨することの重要性というのは、一昔前より重要性が増しているのではないかと。

【委員】

多様な価値観の子どもに触れるという場面が非常に大切で、エコーチェンバーでしたっけ？自分の気に入った意見しか受け入れないという状況が、大人になると顕著になるので、学校現場では多様な意見を受け入れるのは大事だと感じます。

【委員】

単学級から1学年6クラスまで経験しましたが、クラス数に大きく依存するわけではないと感じています。単学級の子供たちが育ってないとか、子供が多ければコミュニケーション力が高まっているとか、極端に感じたことはないです。児童数が学年で200人いれば、多様な子と接する機会が小学生の子供でできていくかというと、大人が期待するほどではないです。児童数が多いからと言って、子どもの人付き合いの範囲が無限に広がるわけではない気はしています。

【会長】

この50年ぐらいで社会の変化の中で今言った話が、どのように位置づけられるかというと、学校よりも学校の外側の変化がやはり大きく、例えば、家庭の中で言うと、兄弟姉妹数が減り一人っ子も多くなっていますし、それに伴い例えば、となり近所で一緒に子供のときに遊ぶ仲間の数が激減しています。私が子供の頃はものすごく人数が多かったから、普通に9人+9人で野球ができるぐらいの子供はすぐ集まったのですが、今は半分も集まりません。

それから学校と企業と家庭以外に、例えば地域社会みたいなところに、地縁や檀家などの集まりがあって、秋祭りとか何とかでお神輿担いだりといった地域のイベントがあり、お兄ちゃん組が面倒見てくれたりとか、そのようなことが割と数十年前もあったのですが、特に東京近郊あたりだと、流入する人がいたり出ていく人がいたりして、地域が定まらず、そうすると学校しかないという感じになってくることはどこでも起こりうる現象だと思います。

例えば、第3のあり方として考えたのは、子供の数が減り、学級数が減っていくのは仕方ないと仮にして、例えば半分だけ統合するという手があります。日数的に週の半分はどこか別のところに行くとかいうこともあり得ますし、学校行事だけ相乗りするという手もありますし、部活動みたいなことを合同でやることも考えられます。教科指導にはなかなか適用しにくいですが、それでもオンラインを活用すればある程度まではいけそうです。例えば、さきほど中学校は教科で回さなければならないが、足りないという話がありましたが、例えば1クラスあたり週2、3時間しかないような教科の先生は、複数校を掛け持ちすれば、それが可能になるわけですが、オンラインを組み合わせれば結構なところが実現する可能性があります。生徒たちもいろいろな人たちとの接点が増え、そこに例えば、地域社会とか福祉等が絡めば、異年齢集団との関わりも生まれ、学んでいることの手応えみたいなものが感じられるかなと思います。

現実に単学級になってくると、中学校の部活動はバレー部入りたいけどバレー部が作れないとか、バスケ部作ったら、野球部は作れないとか、そのような状態なのでもう成立しないわけです。ですので、0か100ではなくて、今こういう時代なのでいろいろな組み合わせでアイデアを絞ったらできるものもあるのではないかと思います。一気にモデルチェンジをするのではなく、いくつか実験してみるモデル校があっても良いと思います。佐倉市ぐらいの規模であれば、できるからやってみてはどうでしょうか。

次回がおそらく学習内容のあり方そのものという本体の議論に入ってきます。何を学ばせるのかが出てくると思うのですが、学びの手応えみたいなことも失われかけていると思います。例えば、子供の数が多いときには受験競争というものがあり、とにかくい

い学校を受けるために点数を取り合う競争がありました。ある種それが唯一のモチベーションになっていたのですが、今はそれがなくて学校に入れてしまうため、あまり面白くなく、学んでいることに全然手応えがなく、何のためにやっているのだろうと思うこともあります。

【委員】

私のところでやった調査で、地域活動や児童館等、地域のお祭りや活動に参加している子供は、非常にレジリエンスが高くなるという傾向があり、なおかつ生活が困難な家庭ほどその割合が高くなっていくという結果を得ています。

生活が困難な家庭の子は、特に低学年の場合、イベントを保護者同伴にしてしまうとなかなか参加できないため、保護者同伴でなくても参加できるものにしなければなりません。そのためには、地域の方やボランティアの協力が必要になります。そのことが最終的にレジリエンスが切れたり、不用意な発言を減らすことに繋がります。やはり、地域内でそのような連携を図ることが非常に重要で、全部学校でやる時代ではないと思います。

先ほど御意見にもあった単学級についても、おそらく他学年との共同や、学校ぐるみで何かやるとか、いろいろなフォローの仕方を探られていて、縦割り学習を通じてそのようなことが実現できているのではないかと思います。その際に、地域の方に協力していただくということを私もやっているのですが、非常に効果があります。どのような効果があるかという点、小さい子の場合には学校の先生になりたい、保母さんになりたいなどは身近な人しか見ていないので、もっと違う人を見せないと、多様化や子供の意欲、チャレンジにはなかなか結びつかないのかなと思います。

【会長】

先ほど学校の先生はまだ今でも人気上位だという発言もありましたが、良くない部分として私もそうですが、学校の先生は割とまっすぐに学校の先生を目指して来てしまう人が多いことです。例えば、高校生にもなって進路を決められないということが良くないことのように言われがちですが、それが普通なのです。それがみんな大学に入ってもまだ迷っていて、大学4年生になっても普通に悩んでいます。

ただ、もう少しそこを広く持ってもらって、地域の中に例えば地域の高齢者の方をお招きして、昔の遊びを教えてもらうようなことが総合の体験としてあったのですが、必要なのは昔の遊びではなくて、今の生活だと思っています。難しいのは、例えば看護師さん、保育士さん、お花屋さんなどは体験しやすいのですが、多くの方はサラリーマンということです。公務員も含めて可視化しにくく、子供たちが体験しに行くことは直接的には難しいということがあって、そのような産業構造になっています。今、ICT等の時代になり、従来よりは見えやすくなってきているのかなと思います。例えば、ユーザー目線で言うと、CDショップは今の世の中にはなく、本屋さんもなく、サブスクとかダウンロードの世界になってきています。子供たちはそれに慣れ、無人レジも普通になってきています。飲食店に行ってもタブレットで発注して、店員とは喋らなくて済む。そこで完結するユーザー目線からは楽ですが、自分たちの雇用が失われていることで、未来の雇用が失われることもあるのです。そのような社会のありようを今一度自分たちに引き寄せて、今、学んでいることの先にそれがあっていいという実感をいろいろなと

ころで持たせる。従来のような、学校できちんと学んでいれば大丈夫だというところの先に、我々がちょっと見据えてプログラム組んだ方が良いなと思っています。学習指導要領や教科書はゼネラルな書き方をするしかないですが、現場の市町村単位の運用で取り組んでいけることだと思っています。

そこは、まさにおっしゃるような地域資源というのはあると思います。機会があれば学校や学校教育に協力してみたいと思っていられっしゃる方たくさんいると思います。そういう意味でも、自分の地域から学校がどんどん減ってしまうとか、自分の母校がなくなったり、名前が変わってしまったというショックは大きいから、その辺のダメージを抑えながら未来志向で行ければ良いなと思います。

【委員】

大人を見せる、色々な職業を見せるというキャリア教育を私の学校でも行っていますが、なぜ算数や数学、社会の勉強が必要なのかを直接教えるよりも、そういった職業の方に来ていただいて、話してもらったら非常にわかりやすいからですね。子供のときにどのように考えていたのか、どのような進路をたどって今の自分がいるのか。サラリーマンではなく、子供になりたいと思う職業であるパティシエや、ちょっと変わったところではパイロットを呼んでくるとか。それらの職業に就くために、今、勉強すること、学習すること、あるいは人とのコミュニケーションが必要だということを学んでもらいます。パティシエは美味しいものを作らなければならないけれど、自分だけが美味しいと思ったものでは駄目で、食べてくれる人が美味しいと思うものでなければならない。そこにコミュニケーションの必要性が出てきます。子どもたちが教師ではなく、そのような地域の方から学ぶことができれば非常に大きい。そうすると、教師も助かります。そのような面では、会長がおっしゃるように、教師を目指してずっとやってきたため、他のことはわからないという場合に、やはりそのようなことを支援していただけると助かるということです。それはとても重要なことだと思います。

【委員】

先生が増えたり、配置が換わらない限り、今のままでは固定化が避けられないのかなと思うと、少ない人数で限られた環境で逃げ場がないという状況になってしまう恐れがある中で、地域の開かれた場所を整えられれば良いのではないのでしょうか。気持ちを切り替えることができる、行ったり来たりできる、学校の中でちょっと嫌なことがあっても外へ逃げて解放できるところが、地域の中にあれば非常に良いかなと思います。様々な子どもがいるからその子の状況によって選べるということも大事だと思います。例えば不登校の子の場所はあるけれど、自分はそこまでいっていない、少しモヤついている場合にはどうしたら良いかわからないのが現状です。

自分は公園の活用をしまして、公園は誰でも来て良い場所ですし、それこそ1年、2年生でも、親がいなくても、来てくださいという形を取っている。もっと身近に、佐倉市の中でたくさんプレイヤーがいて、いろんな場所で、いろんな活動をしているのだけれども、みんなに知られていない。子どもたちや親に届いていないから選べないということが起こっていると思うので、そういうのが選べるような、目に分かる、伝わるような、自分の近所でこんなことやっているんだ、行ってみようと思えるようなものを、佐倉市とかで作ってくれれば良いなと思います。

【委員】

おそらくいろいろな試みはなされていると思います。私もある町で子供ファーストの取組をする中で、夏休みに子供たちがどこで遊べるのかは、子供にとっては重要な問題なので、安全に遊べる場所はどこなのかがわかる一覧表を作ったところ好評でした。おそらくそのような場所は、それぞれ役所の何とか部とか、何とか委員会であるのですが、それらをまとめて見られることが重要です。つまり子供を中心に見られるかが重要で、あると子供に便利で、親も安心して子どもを外に出せるということになります。

【会長】

フランスの教育をずっと研究していきまして、フランスには部活動という概念が一切ありません。学校と学校の外は全く別世界で、例えば学校の目の前で危険なことを生徒がしていても、そこはもうプライベートだから先生は関与しないとスタンスを取っています。アソシアシオンという日本のNPOに近いものがもう100年以上前からありまして、草サッカーするにも、吹奏楽団やるにしてもアソシアシオンを作って登録しないと場所が借りられないようになっています。でもその分、まさにプレイヤーがたくさんいて、一流の芸術家やパティシエやサッカーの指導者もいて活動できるようになっています。

公園というお話もありましたけれども、学校のアンケートでも言及しているように、学校を様々な活動の足場に出来れば良いと思います。学校の見直しが必要になると、管理上の問題や法律上の問題など様々な問題はあるのですが、学校は学校だけで閉じ、教職員だけが仕切っているところがやはり依然としてあると思います。地域の方が学校を足場にして、そこに学校の先生も加わるぐらいのいろいろなオプションを用意していけるかなと思います。

【委員】

今の学校の管理の問題では、例えば学童をどうするとか、放課後子供教室をどうするというところで、どこまで線を切るのか、線を切らなければどこまで校長が責任を取るのかという話になり、よく問題にもなります。ただ、それをきちっとすれば、そういった会長がおっしゃるようなことも可能になると思います。一部可能になっているところも既にあります。

～議事② アンケート調査票（案）について～

【会長】

議事の②「アンケート調査票（案）」について、事務局からご説明をいただきます。よろしくをお願いします。

【事務局】

（資料2～資料10に基づいて説明）

【会長】

アンケートの設問の趣旨をご覧になって、ご意見ご質問あればよろしくお願いいたします。

【委員】

市民と未就学児保護者用のアンケートが同じじゃないですか。どうしてなのかなあという。似ているっていうのは全然問題ないのですが、集計するときは分けて集計されますか？

【事務局】

集計自体は分けるべきなのか、一緒にすべきなのかを悩んでいるのですが、今のところ一緒に考えています。

【委員】

子供がいらっしゃる方の意見と、そうではない方の意見は異なるのが普通だと思います。お子様いらっしゃるのであれば、「今、保育園ですか？幼稚園ですか？未通園ですか？」ぐらいの質問はあるのかなと思ったらなかったのも、お聞きしたところですよ。ぜひ検討していただきたいです。

もう一つよろしいでしょうか。教員用のアンケートで、確かに事前の協議のときにもお話したのですが、学校と職位を回答すると、個人が特定されかねない恐れがあると思います。最初にも書いていたと思いますが、やはり個人名が明らかにならないようにしないと、自由記入をしていただけなくなると思います。誰かに見られたら嫌だなと思う人はいて、特に教育委員会の人間が見ることもあるので、正直に書けないのではないかと思います。学校名まで必要なのかと聞いたのはその懸念でありまして、もう一度検討いただけないでしょうか。

あともう一つ。先生のアンケートの問23と24で、働き方改革で負担に感じる業務の適正化を図るというのは、負担に感じているから軽くして欲しいということでしょうか。特に問23は、負担に感じる業務というのは、「減らして欲しい業務」に該当するのでしょうか。適正化を図るってちょっとわかりにくくて、減らしてくれって言っているのか、何か違う方法があるのかというところの説明が要るのか、設問が違うのかが不明です。問24は、要するに先生の負担が減ったら、業務の処理を当てはめられて、先ほど私が「ブラックですよ」と言ったことと同じですよ。違う仕事をしますよということにならないでしょうか。「違う業務に充てる」のではなく「自分の時間に充てる」などの意見がないといけないと思います。

【会長】

ご検討ください。

【委員】

保護者、それから市民の方へのアンケートについてですが、1クラス当たりの人数はどれくらいの方が望ましいと思いますかという設問があります。子供たちにとって避けた未来が訪れないようにするためであるとか、現状の学級数で教師の人数が決まっている中、教師の働き方を改善するためにも、先ほども話がありましたが、今35人が標準だということを周知した上で答えてもらうとか、国の示す12学級から18学級が標準で、その標準がどういうものなのか示した上で答えていただく方が、より具体的にイメージできるかなという感じがしました。言葉が多くなってしまうと、アンケートの

場合難しいところもあろうかと思いますが、やはりそれを知った上で答えるか、先ほどの話のように知らずに答えるかで、ずいぶん変わってくるのかなと思いました。

【会長】

現段階でお考えはありますか。

【事務局】

1 クラスあたりの人数や学級数に限度があるということは、知らない方がおそらく多いのかなと思います。そのため、いただいたご意見を踏まえ、内容等を検討させてもらえればと思います。ありがとうございます。

【会長】

私も考えたのですが、資料中にイラスト付きのものがあったと思いますが、こちら辺にちょっと声を吹き込んで、2, 3分のミニ動画を作って、YouTube から見てもらうとかちらっと思ったのですが、そこまでしなくてもいいかなと思います。

【委員】

保護者向けで、学校の縛りみたいな情報が端的に付け加えることができるのであれば、蛇足かもしれませんが、教員向けの調査票にも一部加筆すると良いのではないかと思います。教職員は概ねわかっていると思うのですが、ただやはり、本当に単純に、38 人の学級よりかは 18 人の学級の方がいいよねっていう、短絡的というとまた失礼な表現なのですが、今の変えられない現状を踏まえてのアンケートですよというのを教員にもわかってもらえないと、目の前のことでしか答えない可能性もあるのかなという心配をしました。

あと、アンケートの最初の表紙のところに、およそ 20 分かかりますと書いてありますが、これはアンケートを求めるときのマナーみたいなものなののでしょうか。これも本当にくだらない話ですが、学校としては、授業の中でやるのであれば、20 分っていうこういう目安があるのは大変助かるのですが、逆に保護者が見たときに、こんなのにかかるのだったら嫌だと思うのではないかなと思いました。

【事務局】

まず一点目の教員向けにも標準という規模を示したらという意見については、少し検討させていただきたいなと思います。確かに人数を減らすと、教員の数の配置は変わらないので、学校運営自体がきつくなるところは何かの形でお知らせをした方がよいのかなと感じているところなので、ここは検討させていただきたいと思います。

次に案内文のところの目安時間についてですが、このぐらいでできますというようなイメージを持っていた方が、入口としてはわかりやすいかなとは思いますが記載しています。20 分をどう捉えるかですが、最初に全体の時間をお示しする方が説明としては丁寧かなとは思ったのですが、確かによく考えると 20 分は長いなという考えもありますので、バランスを考えていきたいと思います。

【会長】

嘘は書けないですからね。業界関係で回ってくるアンケートも目安20分と書いてあることが多くなりましたが、一般の方だとそんな暇じゃないしということになるかもしれません。

【委員】

資料3・資料4は、市民・未就学児向けにも作成するのでしょうか。

【事務局】

資料3をベースにしたものを送付予定です。資料3は大人向けというイメージです。子どもに対しては資料4を送付します。

【会長】

よろしゅうございますか。

だいぶ目配りをいただいていて、結果がどういうふうに返ってくるのかというのはやってみないとわかりませんが、課題は共有できるかなと思います。

【委員】

細かい点で恐縮ですが、問8は、相談相手に関する問いに対して、選択肢が担任の先生から始まっているのですが、多くは友達や家族が普通だと思います。だからそれをあえて下に持っていくのではなく、上段にもっていくべきだと思います。

【委員】

関連して、校長先生が一番下で良いと思います。

【会長】

先ほどカウンセラーの話がありましたが、本来はちゃんと学校カウンセラーみたいなことをきちんと制度化して、生活指導とか、心理的なケアとかそういうところに当たるべきなのですが、巡回ではもう限界あるのと、実際に現場で伺ってみると、学校の先生の方が生徒を理解していて、関わり方も上手です。カウンセラー的なものが必要なのかという議論もありますが、ただ、諸外国に比べても日本の場合は、学校の先生がいろいろな意味で背負い込み過ぎてるから、そういう文化になってしまっているところがあって、そこを見直すのかどうかということが課題だと思います。

今のところやはり学校の教員に一番負担がありますから、部活動なども地域に移管するというフランス的な話を、おそらく国では進めているとは思いますが、ただ、やはり部活をやりたくて先生になりたい人は結構います。

【委員】

うちは新設校ですが、中学校の部活動は設けておらず、スクールカウンセラーとスクールソーシャルワーカーは常駐です。面談時は必ず担任とスクールカウンセラーを同席させています。やはり色々と効果的です。

【会長】

そういう取り組みについてまたぜひ伺わせてください。長いこと同じ枠組みでやってきて、うまくいってきたという感覚はありますが、そろそろモデルチェンジを考えないといけないと思っているので。いろんなバージョンを用意しておくということですね。

アンケートの件については一旦よろしいでしょうか。

今回の意見を踏まえ、引き続きご検討をお願いします。

【事務局】

(次回会議の開催などについて伝達)

【会長】

後学のため、委員の先生方と連携して、現地の視察もしたいと考えております。本日はありがとうございました。